私たちと発達保障

実践、生活、学びのために

京都教育大学　丸山啓史

◆第８回　書く

書くに値するものは、取り組んだ実践だけでなく、印象に残った子どもたちの姿、小さな発見、日々の自分の思いなど、幅広くあるのではないでしょうか。

まるやま　けいし／1980年生まれ。京都教育大学准教授、全障研常任全国委員・京都支部長。専門は障害者教育学。著書に『発達保障ってなに？』（全障研出版部、共著）など。

実践を書く文化

何年も前のことですが、半年に一回くらいの頻度でロンドンに行っていた時期があります（省エネ等の観点から反省して、今は飛行機には乗らないようにしています）。イギリスの知的障害者教育について調べていて、障害のある青年・成人が通うカレッジを訪問したり、大学図書館で資料を集めたりしていました。

イギリスのことを調べながら感じたのは、実践の様子について記された文献が少ないということでした。概説書、調査報告、政策提言などはあるのですが、実際の学習の中身や学生の様子がわかるものをほとんど見つけられなかったのです。具体的な活動の内容がうかがえるのは、マニュアル本ともいえるような手引書くらいでした。一人ひとりの名前が出てくるような実践報告を思いだすことができません。

探し方が不十分だった可能性もありますし、障害のある人の継続教育の領域に特有のことなのかもしれません。けれども、僕の見聞の限りでは、イギリスの教育に関して広くみられる傾向のようにも思われました。

それに対して、日本では、いわゆる「ハウツー本」も多いとはいえ、学校や施設の実態や実践が少なからず文字にされてきています。実践の記録・報告がたくさん書かれているのは、もしかすると日本の教育の特徴なのかもしれません。その当否はわかりませんが、いずれにしても、実践を書くという文化は〝あるのが当たり前〟のものではなく、守り育てるものなのだと、強く感じたものでした。

実践づくりと実践記録

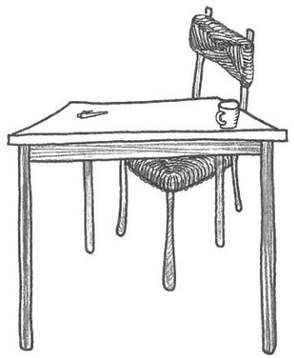
実践を書くことは、主体的に実践をつくっていくことと深く結びついているように思います。手引書に従って決まった手順を実行するのであれば、その「実践」について書くということにはなりにくいでしょう。実践の担い手たちが自ら考え、振り返り、経験を交流する営みのなかに、実践を書くということがあるのだと思います。

日本においては、教育の実践記録についての議論が少なからず重ねられてきました[1]。また、福祉の分野に関わっても、実践記録の重要性が語られてきました[2]。そうした議論や実践記録そのものの蓄積は、とても貴重なものだと思っています。

僕自身は、自分の実践を文章にまとめた経験はほとんどありませんが、書くことを仕事や生活の重要な部分にしている身ではあります。ここでは、そうした自分の経験もふまえながら、少し広く、書くことの意味について考えてみたいと思います。書くに値するものは、取り組んだ実践だけでなく、印象に残った子どもたちの姿、小さな発見、日々の自分の思いなど、幅広くあるのではないでしょうか。

記録すること

自分自身のことでいえば、いかにも仕事として書く論文や文章のほかにも、定期的・日常的に書いているものがあります。たとえば、全障研京都支部の毎月のニュースでは、「おんぶにだっこ」というコーナーを3年ほど前から書かせてもらっています。僕には保育所に通う2人の子どもがいるのですが、そんな自分の子育てに関わる600字程度のエッセイです。泡立つウンチの話とか、千変万化する寝姿の話とか、バリカンで家族みんなが丸刈りになった話とか、そういうことを書いています。



申し訳ないくらい、たわいのない中身が多いのですが、僕自身にとっては、このエッセイの存在が思った以上にありがたいのです。毎回の締め切りに合わせて書いていると、いつの間にか子どもの成長記録ができています。写真のアルバムのようなものです。ときどき読み返すと、「道端の木の実をよく採っていたな…」「動物図鑑にかじりつきだったな…」などと、その頃のことを思いだします。

僕は、文章で読んだことはわりと覚えているほうだと思うのですが、目の前で起きたことはどんどん忘れていきます（子どもたちのしたことや言ったことを再現するかのように語る実践家の方に出会うと、「すごいなあ」と心の底から思います）。ですから、書いておくことが助けになります。改めて言うまでもないことですが、記録を残したり、記憶に留めたりする手段として、やっぱり書くことは大切なはずです。

意識すること

書くことで、日常のできごとに意識的にな